慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「いのち」の経済思想史 : そのいくつかの断面
Sub Title	Some aspects of "human life" in the history of economic ideas
Author	飯田, 裕康(Iida, Hiroyasu)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2009
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.1 (2009. 4) ,p.23- 36
JaLC DOI	10.14991/001.20090401-0023
Abstract	〈いのち〉の問題を経済思想史のなかでいかに読み解くか。これが, 小論の基本的視座である。この問題を直截的に論じたこの分野の成果は, きわめてまれで, 経済科学の方法的な欠陥を露呈しかねない問題でもある。ここでは, この問題に迫るために, 主として重商主義期の思想における社会的な排除のrhetoricに注目した。商業活動とくに植民地貿易にからむ〈いのち〉をめぐる隠された言説は, 「近代」の経済思想の闇の部分を解き明かす鍵になろう。 The basic question this study addresses is how we analyze the problem of "human life" in the history of economic thought. The results in this field where this problem is discussed straightforwardly is extremely rare and reveals the methodology defects of economic science. Herein, to approach this problem, I primarily focused on the rhetoric of social exclusion in the ideas of the mercantilist period. The hidden discourse concerning "human life" embedded in commercial activities, especially colonialist trade, holds the key for clarifying the dark parts of "modern" economic thought.
Notes	小特集 「いのち」の歴史学に向けて : われわれはいまどんな時代に生きているのか
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20090401-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「いのち」の経済思想史―そのいくつかの断面―

Some Aspects of "Human Life" in the History of Economic Ideas

飯田 裕康(Hiroyasu Iida)

〈いのち〉の問題を経済思想史のなかでいかに読み解くか。これが，小論の基本的視座である。この問題を直截的に論じたこの分野の成果は，きわめてまれで，経済科学の方法的な欠陥を露呈しかねない問題でもある。ここでは，この問題に迫るために，主として重商主義期の思想における社会的な排除の rhetoric に注目した。商業活動とくに植民地貿易にからむ〈いのち〉をめぐる隠された言説は，「近代」の経済思想の闇の部分を解き明かす鍵になろう。

Abstract

The basic question this study addresses is how we analyze the problem of “human life” in the history of economic thought. The results in this field where this problem is discussed straightforwardly is extremely rare and reveals the methodology defects of economic science. Herein, to approach this problem, I primarily focused on the rhetoric of social exclusion in the ideas of the mercantilist period. The hidden discourse concerning “human life” embedded in commercial activities, especially colonialist trade, holds the key for clarifying the dark parts of “modern” economic thought.

「三田学会雑誌」102 巻 1 号（2009 年 4 月）

「いのち」の経済思想史

——そのいくつかの断面——

飯　田　裕　康

要　　旨

〈いのち〉の問題を経済思想史のなかでいかに読み解くか。これが，小論の基本的視座である。この問題を直截的に論じたこの分野の成果は，きわめてまれで，経済科学の方法的な欠陥を露呈しかねない問題でもある。ここでは，この問題に迫るために，主として重商主義期の思想における社会的な排除の rhetoric に注目した。商業活動とくに植民地貿易にからむ〈いのち〉をめぐる隠された言説は，「近代」の経済思想の闇の部分を解き明かす鍵になろう。

キーワード

重商主義，トマス・モア，マリア・シビラ・メーリアン，王立協会

はじめに

近年「いのち」をめぐる諸問題への対応は，この問題解明の困難さを示すかのごとく多方向かつ多層的展開を示してきているといえよう。(1) 現代に生きるわれわれが生きにくく，かつ死ににくい情況のなかに在るという事実が，ますます日常的意識のなかに占める場所を広げつつあるばかりでなく，そうした意識を包含するわれわれの生活世界そのものが得体の知れない実体のない実体として動き続けていることとも関係があろう。「いのち」の問題は，まさにわれわれ自身による統御を許さない客体として，われわれの手をすり抜けてゆきつつあるように思う。それを物象化の今日的側面として捉えること，そのことの軽さもまた，明確になりつつあるように思われる。

この問題に接近しようと幾様かの思考にとりとめない時間を費やしている最中で，筆者は「NHK

(1)　小稿は，もともと清水透，高草木光一両教授をコーディネーターとする慶應義塾大学経済学部 2008 年度春学期開講の「〈いのち〉の歴史学」において発言の機会を与えられたことが契機となっている。この講座に示された両教授の問題関心はもとより，参加した学生諸君や，一般市民の方々の実に豊かな発想と事柄の性質からする困難さを共通了解とする討論から，計り知れないほど多くの刺戟をえている。各講師による連続講義そのものが，この問題の由来や現状にたいする認識の多様性ないし拡散性を如実に示すものとなっていた。

スペシャル　硫黄島玉砕戦」のある場面での元兵士の述懐に強い衝撃を受けた[(2)]。地下壕の出口に折り重なる兵士の死体を楯として，撃ち込まれる銃弾からわが身を守ったその兵士は，硫黄島では戦死者は二度死んだのだと語っていた。無論，他人の死など，自分の死もまた，かえりみる余裕のないあの極限状況のなかで，死体を楯としてわが身を護る行為を責めるものをわれわれは何ももたない。しかし，このことをただあの極限状況のもたらしたものと，突き放すこともできないように思う。生きることにも死ぬことにもなんの違いも見出せなくなった状況は，われわれ自身の〈いまを生きる〉情況と近似しているといったら過言であろうか。

また，もっと近いところでいえば，あの秋葉原における無差別殺人事件を想起しなければならないであろう。いま，死に直面し，本人がその意志を明確に示す余地すらないところで，周囲がいかに死を迎えさせるかを，際限なくテキスト化しなければならないような情況，不治の病であるがゆえに，それによって迎える死にひとしおの意味づけをしたいと，終わりのない思念をめぐらすような情況，そうした情況とはまったくことなり，死ななくともよかった死を強制された人びと。いったいこうした事象にわれわれはどう立ち向かったらよいのであろうか。回避する余地さえなく，まさしく突然襲いかかる死。これらを犯人とかれの行為の犠牲となった人との関係から解き放って，あの死は一体何だったのかと考えたとき，犯人への憎しみの先に深い闇が際限なく拡がってゆくとの想いを強くする。

いまひとつ，言及を避けられないのは，昨年夏以来進行しつつあり，これも終りの見えていない「世界的金融危機」問題がある。アメリカにおけるサブプライム問題[(3)]や日本の「派遣切り」に如実に示されているように，弱者が，いまや，大袈裟にいえば死の淵に立たされているとさえいわねばならないような過酷な情況のなかに，われわれはおかれているということである。債務不履行で破綻し住む人のない「売り家 For Sale」の看板のむなしい列，あれこそ現代の死の影といわずになんといったらよいのであろうか。「いのち」の問題は，ごく当たりまえの市民の，まさしく「現場」となったとさえいわねばならない。なぜなら，制度としての既定の労働運動によっては，解決への糸口さえつかみにくい，「生かされているもの」のギリギリの「居場所」そのものが否定される現実には，個と個の連帯しか，自らを証しだてる道はないからである[(4)]。

小論の表題から一見迂遠な上記のことを，なぜここで述べなくてはならないのか。近代の所産としての経済学 Political Economy は，およそ「いのち」をそれ自体として問いかけることのないま

---

(2)　「NHK スペシャル　硫黄島玉砕戦～生還者 61 年目の証言～」2007 年 8 月 5 日再放映。

(3)　「サブプライム問題」はけっして金融問題に終わるものではない。なるほど，この問題の原因は，今日の金融化された資本主義経済が仕組んだ巧妙なシステムの破綻ではあるが，しかし，あきらかに貧困問題であり，アメリカ社会の構造的矛盾のあらわれであろう。これについては，多くの刊行物があるなかで，堤未果『ルポ 貧困大国アメリカ』岩波新書，2008 年，の説得的な報告を見よ。

(4)　こうした観点の確たる礎石を，われわれは小田実の諸言説のなかに読み取れるであろう。例えば，『生きる術としての哲学　小田実最後の講義』飯田裕康・高草木光一編，岩波書店，2007 年を見よ。

ま，近代そのものの終焉を迎えつつあるからというのがその理由の一つである。社会諸科学の中心にあって，並ぶもののない論理的厳密性を実現し，社会諸事象とそれがもたらす問題性の解明に，万能と自他共に認めてきた（？）経済学は，「いのち」に関する限り最も遠いところでしかものが言えないできた。[(5)]「いのち」の narrative への彷彿と起こる期待にいちばん遠いところに立つ以外にないという現状を，認めざるをえない。前世紀末，bio-economics への傾斜が見られたものの，いまだにその定義さえ確立していない。[(6)] bio-economics もまた，生きるという現実よりも，事象としての生，モノとしての生から出発する以外にないと考えらえているようだ。だが，近年ようやくにして本来の道への模索が始まった。[(7)]

I.

ここではまず，近代人文主義の出発点を画するトマス・モアの思想，とりわけ社会思想史の古典ともいわれる『ユートピア』をとおして，近世から近代への転換期における「いのち」への対処を瞥見しておきたい。[(8)] 結論を先取りしていえば，トマス・モアにおいてすでに，「いのち」の問題は現に生きる一人ひとりの手を離れて人びとの間の関係性に隠された事柄として，見ようによっては冷酷に扱われざるをえなくなっている。それほどに人は人との係わりを自分一個の存在を超えるもの，すなわち他在として認識せざるをえなくなっている。あるいは，ひと＝ひとの係わりという事柄に

---

(5)　経済学 economics がおかれた情況についての卑見は，慶應義塾大学経済学部編『市民的共生の経済学 IV　経済学の危機と再生』弘文堂，2003 年刊を参照されたい。

(6)　「バイオエコノミックスは，経済モデルを使った生命ある資源の動態に関する研究である。それは，環境経済学や生態経済学のような方法を通じて，生物学の経験的文化と経済学の理論的文化とを架橋する試みである。」
（http://en.wikipedia.org/wiki/Bioeconomics#cite_note-0）
「バイオエコノミックスが具体的に示そうとするのは，以下のテーゼである。すなわち，生物的資本，人的資本や環境をも破壊しようとする競争的資本主義にたいする別の選択肢を用意すること。この選択肢こそは，古い（産業革命以前の）経済と新しい（グローバルな）経済との中間に位置する経済学の第三の道なのだ。」
（http://www.scienceofbioeconomics.com/what-is-bioeconomics.asp）
これらでは，「いのち」は資源ないし資本でしかないことに注意！

(7)　最近の方向性を示すものとして，Catherine Gallagher, *The body economic life, death, and sensation in political economy and the Victorian novel*, Princeton UP, 2006. がある。とくに第 2 章。

(8)　イギリス近代思想の歩みを，ユートピア思想への言及なしに語ることはほとんど不可能といってよい。とくに経済学（Political Economy）の生誕にいたる 18 世紀後半から 19 世紀初頭にかけての，なんらかの文脈によった progressive society あるいは，次節で取り上げる commonwealth への言及の背後には，それらに対抗する，あるいは，対抗することによって連接しようとする idea としてユートピアにかんする言説が控えている。こうした論点からのユートピア思想については，Gregory Claeys (ed.), *Utopias of the British enlightenment,* Cambridge, 1994. を見よ。

自らを仮託せずしては，自らの生そのものを見出しがたい情況のうちに存在する。

Sir Thomas More（1478–1535）は，ロンドン・シティーに生まれ育った生粋の都会人であった。父親の影響もあって法律家を志したが，友人のコレットなどの影響もあり，当時のカソリック信仰に懐疑的ではあった。かれが 1535 年 7 月にロンドン塔において処刑された直接の原因は，カソリックの教義をたてに，ヘンリー 8 世とキャサリンの結婚に反対したことにあった。反逆罪の罪に問われたのである。

かれは，すでに trade ないし traffic が生活世界そのものとなりつつある段階に生きていたのである。それであるがゆえに，『ユートピア』に登場する識者ヒュトロダウエス[(9)]は縦横無尽に世界を駆け回ることができたのである[(10)]。いわば，商業ネットワークのうえにユートピアにかんする narrative は成立すると了解されるような時代，トマス・モアの生きた時代はこうした時代であった。

モアのユートピア構想はけっして封建制度や伝統的国制への批判に終わるものではない。むしろ，拡張過程を辿り，政治思想的にも無視しえない影響力をもちつつあった新秩序，すなわち，商業革命の展開や，それらと妥協を図りつつ国制の保持・権力者の保身への危機感，それが日々もたらす個人生活領域の不透明性の深化にたいする危機意識に動かされたものと見ることはできないであろうか。そのことは「健全かつ英明な制度をもった市民たちにはどこでも出くわすということはまずないからだ」というトマス・モア自身の慨嘆のなかに遺憾なく示されていよう[(11)]。

このような政治体制の危機を内包する人間的情況は，以下のようなヒュトロダウエスの現状観察

---

(9)　ヒュトロダウエスは，『ユートピア』第 1 巻「社会の最善政体について」のなかに登場する人物で，著者は，友人ピーター・ヘレスの紹介で知己を得たとされ，「同時代の人のなかで，未知の人々，未知の土地について彼ほどに沢山話のできる人はいません。」（58 ページ）とされる。また，かれがたんなる船乗りとして世界を旅したのでないことも強調されている。（59 ページ）

(10)　モアの終生の友であったエラスムス（Desiderius Erasmus　1467–1536）は，『ユートピア』のモアについてつぎのようにいう。

「あの天才的才能が，もしイタリアで訓練されていたら，また，今日ただ学芸のためにだけ向けられていたら，と思います。山野の樹木が秋ともなれば豊かな果実で飾られてくるように，あの才能も自信にふさわしい実りで飾られるところまで成熟していたら，あのすばらしい沃土にしてなしえなかったことがあるでしょうか。（中略）かれは欧の施設としてフランダース人のもとに二回おもむいた以外，故郷の英国を離れたことはありません。彼には結婚生活があり，家庭の世話があるだけでなく，公職があり，多くの訴訟事件を扱っており，さらにまた彼の王国の多くの重要事でわずらわされています。」（以下，モアからの引用は，E. Surtz, S. J. and J. H. Hexter (ed.), *The complete works of St.Thomas More*, Yale U.P. 1965. 邦訳トマス・モア，澤田昭夫訳『改版　ユートピア』中公文庫，1993 年刊，に依った。Works, vol.4, p.2. 11-12 ページ）。

ここで，エラスムスが述べるように，モアはまさしく市井の人であった。彼によるユートピアという「政体」の構想は，まぎれもなく彼のロンドン市民としての公的空間のうちから発露したものであって，けっして机上の空想的な筆の運び，あるいはたんなる Roman のしからしむものではない。こうした生活人トマス・モアについては，Peter Ackroyd, *The life of Sir Thomas More*, London, 1999. を参照。

(11)　More, op. cit, p.53. モア，前掲訳書，62 ページ。

のなかに表出されている。

「羊は非常におとなしく，また非常に小食だということになっておりますが，今や〔聞くところによると〕大食で乱暴になり始め人間さえも食らい，畑，住居，町を後輩，破壊するほどです。この王国でとくに良質の，したがってより高価な羊毛ができる地方ではどこでも，貴族，ゲントルマン，そしてこれ（怠惰とぜいたく）以外の点では聖人であらせられる何人かの修道院長さえもが，彼らの先代当時の土地収益や年収入だけでは満足せず，また無為，優雅に暮らして公共のために役立つことは皆無，いな，有害になるのでなければ飽き足りません。つまり残る耕作地は皆無にし，すべてを牧草地として囲い込み，住み家を壊し，町を破壊し，羊小屋にする協会だけしか遺しません。さらに，大庭園や猟場をつくるだけではあなた方の国土がまだ痛み足りなかったかのように，こういうえらいかたがたはすべての宅地と耕地を荒野にしてしまいます。」(12)

ここに示されるように，イギリス毛織物産業の進展につれて進行した耕地の牧場転換としての土地囲い込み。これをもたらす貴族・ジェントルマン・聖職者から商人までの飽くことない貪欲。トマス・モアはこれを「祖国をむしばむ恐ろしい疫病でもあるかのような貪欲」とさえいう(13)。その結果は以下の通り(14)。

「よく見てください。彼らは，自分たちのなつかしい，住みなれた家から出て行きますが，身を宿すところを見つけることはできません。家財道具は，買い手がでてくるのを待つ余裕があったとしてもどうせ高くは売れないものだが，いまはとにかくかたづけることが先決なので彼らはそのいっさいをほとんどただ同然で売り払ってしまいます。その金を放浪中，わずかのあいだに使い果たしてしまうと，あとは盗みをやって，そのあげく——正当にも——絞首刑に処せられるか，それとも放浪しながら物乞いするか，この両者以外にはどういう道が彼らに残されているでしょうか。」

さらに先では，「この惨めな貧困，貧窮化に，時期違いのぜいたくが加わったらどういうことになるでしょう」とさえいわせている(15)。

伝統的国制の危機が迫る近世イングランドの社会，それを従来のように「移行期」「過渡期」という視角から見てしまうにはその危機の構造のあまりの現実性に，かえって驚きをさえ禁じえない。羊が人間を食らう，といわれるような情況は，いってみれば，人間が人間を食らう，人間自身が人間の存在を否定してゆかざるをえない，社会的カニバリズムといったら言い過ぎであろうか。モアは，こうした情況の根因とも思われるものを私有財産制のなかに見，それを擁護する政体の乗り越え・

（12） More, Works, vol.4, p.66. モア，前掲訳書，74–5 ページ。
（13） More, op. cit, pp.66–7. 75 ページ。
（14） More, op. cit, p.66. 75–6 ページ。
（15） More, op. cit, p.69. 78 ページ。

否定の可能性を追求しないわけではない。しかしながら，それ以上に近代政治思想のなかに埋め込まれた深い闇，すなわち，いのちの選別の社会システム，法を含めて，事柄の上では「平等」な近代は，生活者のいのちには排除の論理を貫徹しようとする。こうした点に，われわれは近代固有の rhetoric を読み取らざるをえない。とはいえ，モア亡き後情況は公共福祉を根底的課題として，排除論理の調整に向かわざるをえない。Commonwealth 論の登場は，それにたいする応答の一つなのであろう。

II.

Sir James Steuart（1712–1780） の『経済学原理』（*An inquiry into the principles of political oeconomy*, London, 1767）はアダム・スミスの『国富論』刊行に先立つこと 9 年，経済学の歴史上——とくに英語圏において——経済的活動の仕組みを原理的・体系的に解き明かそうとした最初の画期的作品である。本書上梓の経緯は，かれの数奇な生涯とともにスチュアート研究史上大きな関心を呼んできたものであることは，周知の通りである。とりわけ，上記表題に見る oeconomy の一語は，この書物に表明される特異な理論とともに，ここに示される 18 世紀後半におけるアダム・スミスの登場を目前にした時代の経済思想の複雑な構造を指示するほどの意味を内含しているといえなくもない。アダム・スミスもまた，『国富論』第 4 篇の序にあきらかなように，スチュアートによる oeconomy なる語彙をまったく視野の外に置くことはできなかったのである。

スチュアートの『原理』が単純な重商主義経済学説を展開したものでないことは，すでに定説といってよいし，またいわゆる古典経済学の前哨というにはあまりに特異な構成をもっていることもまた否定しがたい。とくに，かれのモデルともいうべき oeconomy の実態がいかなるものであるかについても，必ずしも定説があるわけではない。しかし，この語彙そのものは，かれが長年ヨーロッパの地において「亡命」生活を送ったがゆえであるというほど単純な語彙選定によるものでないこともあきらかであろう。16–7 世紀，イングランドにおいては，しばしばこの言葉が使用されていたのみならず，当時の経済生活の実態の一面を表示する格好の用語であるとする考えも，けっしてないわけではない。(16)

Oeconomy はその原義をたどれば，ギリシャ語の *oikos* に行き着くこともこれまでつとに主張されているとおりであり，その意味が「家計」household であることもあきらかである。(17) しかし，ス

(16) Wrightson, Keith, *Earthly necessities　Economic lives in early modern Britain*, Yale University Press, 2000, p.30.

(17) 元来，economy の原語とされる oeconomy であるが，しかし，前者を経済，あるいは節約と捉えると，それは後者のもっている語感と大いにことなる。そのうえ，economy には，組織あるいは有機体的組織といった意味合いもあり，後者の含意はむしろそれに近いと考えるべきであろう。

チュアートは家計経済学を展開しようとしたわけではなく，スミス『国富論』の表題にある *Wealth of Nations* のまさに nation に相当する領域に切り込もうとしているのである。そのうえ，スチュアートが家計における消費と生産の均衡に着目したことが，一国経済の生産と消費の均衡をモデル化する契機をなしたと考えるならば，これは，まさしくケネーの『経済表』（*Tableau economique*, 1758）の企てとも共通する側面を表していることになる。

今ひとつ，見過ごされてならない点は，oeconomy はまさしくひとつの政治的世界を対象とするとの，方法的視点の鋭い提示ともなっている点ではなかろうか。すなわち，oeconomy は為政者 statesman の統治の対象あるいは governance そのものを表しているということであろう。スチュアート『経済学原理』がこうした統治の科学として書かれるについては，ジャコバイトとしてのスチュアートの政治思想，nation の統治機構とは対極にあるような統治『原理』の表現とも考えられる。そうだとすれば，このようなコンテキストにおいて，oeconomy と Commonwealth をめぐる政治思想の展開との同根性を想定してみなければならない。

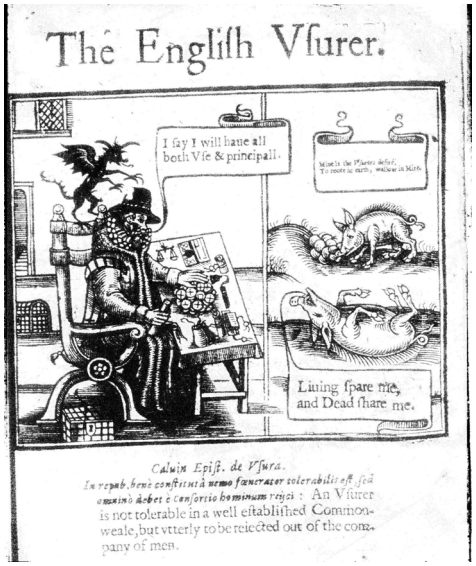
Commonwealth 思想の展開は，たんに共和制思想の展開であるわけではない。[18] イングランドにおける宗教改革から王政復古にいたる約 2 世紀に達しようという時代，経済的にいえば，大航海時代から前期重商主義時代にかけてということになるが，とりわけ 16–7 世紀の経済思想の展開を支える重商主義経済思想へ批判的に対峙する思想として，看過しえない歴史的な意味を有する。すなわち小稿が企てようとしている「いのち」をめぐるごく短期間の思想史的な達成と結びついている。それをあえて理論的に表そうとするなら，Commonwealth の内実としての協同性をめぐる社会的排除にかかわる rhetoric とそれへの対抗という意味合いをもつものといってよいであろう。[19] Commonwealth をめぐる協同性は，それを維持しようとする政治的意図が，無条件の共同体への取り込みを前提にしているわけではなく，共同体からの排除を図りながら協同性を維持する仕組みのうえに成立していたのであって，したがってきわめて政治的な性格をもっていた。地域化され分断された社会は，それら社会間で，渡り職人の域を超えた頻繁な人の流動が見られ，その面から見れば，中世的静態的な協同性とはことなり——商業の展開などがあって——近世，Commonwealth というパラダイムのなかでの協同性には，構成員による政治的意図を排除として冷徹に貫徹しようとする rhetoric が大きな役割を果たし，実質的に統治機能を果たしていたのかもしれない。

いまひとつ Commonwealth 思想との関連で注目すべきは，これまで，重商主義経済思想の中心的論点のひとつをなした利子をめぐる思想の含意ではなかろうか。

（18）「commonwealth とか commonweal という用語は，16 世紀のキーワードであった。」Wrightson, op.cit,p.27.

（19） これについては，救貧思想の展開と地域共同体のそれへの対応を micro-politics という視座から捉えようとした Steve Hendle, *On the parish?*, Oxford, 2005. が参照されるべきであろう。本書と，Wrightson, K. and D. Levin, *Poverty and piety in an English village*: *Terling, 1525–1700*, New York, 1989. との対比は興味深い。

図 1　イギリスの高利貸



高利 Usury への反対は，16–7 世紀にかけては次第に適度な利子は容認するという方向に向かう。まさに Commonwealth は，この適度な利子の容認をひとつの梃子として，いわば，厳格な反高利への要求も，過酷な徴利にたいしても，まさしく公共福祉すなわち協同性の維持の観点から批判を展開する。商人も，農民も，聖職者も，いずれの利害からも反対しえないような適正な利子（率）の維持が求められる。(20) 利子は，政治的な問題とし極端な利害を排除する rhetoric のうえで容認されてゆく。しかし，ここにも社会的な排除の論理は貫徹される。

これにかんする一つの事例は, 高利批判のパンフレットとして 1643 年に刊行された, John Blaxton, *The English usurer* のなかにみることができる。(21) ここには，タイトルページと見開きに口絵ページがあり一葉の木版による図版が印刷されている（図 1)。オフィスに置かれたテーブルに一人の金貸しとおぼしき人物が座っている。テーブルの上には，お金（金貨？）の山と，金袋，天秤等が置かれ，彼の右手には，証文とおぼしき書類が握られている。彼の座るいすの背もたれ，あるいは，かれの肩には，悪魔が控え，彼の仕事を見守っている。彼の吹き出しには,「私は利子も元本もみな手にいれる」とある。さらに彼の仕事ぶりは，2 匹の豚とおぼしい獣の図像で示され泥や汚物にまみれて腹一杯食べ，満腹で動けなくなっている様子が画かれる。

（20） 典型的には，Thomas Wilson, *A discourse upon usury*, 1572. をあげることができよう。また，ここで取られている対話という言説展開の手法は，それ自体が大きな政治的意味合いを内包しているというべきであろう。

（21） このパンフレット口絵ページ掲載図版の解読は，日本大学経済学部編『日本大学経済学部　アメックス文庫稀覯書展』1989 年刊掲載の図版（56 ページ）によった。なお，本パンフレットのテキスト繙読は，慶應義塾図書館提供の Early English Books Online サーヴィスによるデジタル画像によった。なお，図 1 に描かれる豚は，異教徒の図像的表現でもある点に，注意。

高利貸と悪魔の取りあわせは貨幣の一面を伝える図柄として，絵画のなかにもしばしば登場する。時に聖書が画き込まれることさえある。高利の象徴としての悪魔はまた，高利貸自体の象徴的表現であり，画かれる豚とおぼしき獣は，あたかもモアにおける羊のような意味をもたされていると考えられる。この口絵に添えられたキャプションには，「高利貸は十分に発展した commonweal では認められないどころか，commonweal の構成員によって拒否される。」と記されている。

しかし，高利貸をはびこらせる貨幣経済の歪みは，近代初頭の貨幣不足状態のもとでは，容易には消滅しない。統治者の財政にまで食い込む高利貸にいかに非難が集中しても，あるいは，権力による「利子率引き下げ」が強制されても，Banker として信用という新手の「貨幣」を操作するようになると，[22] 情況はいっそう苛酷になる。[23] 17 世紀は，貨幣の信用への転換をうながす，イングランド貨幣史上重要な時代であり，信用を含む広義の貨幣へのアプローチは，貨幣利用機会の拡大をもたらす一方で，個人や家計の信用格差を広げつつ貨幣経済からの排除を社会的に強制されるような社会層を広範囲に生み出すことになった。このような観点は，今日の「金融排除」の論理を検証する際にも有益なリファレンスとなりうるであろう。[24]

III.

イングランド近世近代をまたぐ約 300 年の期間は，おおまかに重商主義時代と称されるが，これまでもふれてきたようにその理解は今日きわめて流動的である。重商主義はなんらかの形で，一国の経済成長が対外貿易に依存するような時代であり，貿易差額が GDP の増大を左右するような経済構造のもとに作動した経済システムであった。とくにイングランドの場合にそれが典型的に現れることは，周知の通りである。いわゆる大航海時代を始点として，通商ネットワークの世界規模での拡張は，イングランドに多くの富をもたらした。貿易差額が通貨供給に連動し，海外市場を拡張し，それが産業（“Trade”）の拡大を刺戟した。こうした流れを，視座を変えて海外市場の側から見たとき，重商主義は，後進地域にたいする壮大な収奪のシステムを作りあげたことも看過しえない。

（22） 近年の重商主義研究において特徴的なことに，「信用」概念の見直しと，それを検証する実証研究が盛行をきわめていることである。とくに，formal な，あるいは制度化された信用と，informal な信用とを区別する視点は，信用制度史あるいは信用思想史にあらたな研究対象を拓く画期的視点であろう。例えば，Craig Muldrew, *The economy of obligation : the culture of credit and social relations in early modern England*, Macmillan, 1998.

（23） Banker とは，いわゆる近代的銀行業者のことではなく，貨幣取扱業全般をも包括する用語である。小論との係わりで，歴史的に見れば，両替商から質屋にいたるまで，この用語によって表現されている。また，制度化された救貧 poor relief の具体的執行機関として，Bank of Charity などが，17 世紀にはさかんに提案された。

（24） この論点については，福光寛『金融排除論：阻害される消費者の権利と金融倫理の確立』同文舘，2001 年を見よ。

略奪的な商業取引や資源の略取あってこそ，とくに 17–8 世紀のイングランド・イギリスの発展はありえたことはいうをまたない。このような経済的発展の時期に，いわゆる科学革命が重畳的に生起したこと，それに海外植民地が大きく「貢献」していたこと，そしてそこには，あからさまな「いのち」の問題が存在したことを否定することはできない。

1660 年，ロンドンに設立された王立協会 Royal Society（1663 年の特許状では The Royal Society of London for Improving Natural Knowledge）は，たしかにイングランドの学問を実証・実験をともなう経験重視の学問として発展させ，世界をリードする水準に引き上げたことは否定できない。他方，王立協会の有力会員による研究が，植民地の収奪の上に展開したことも事実である。その一例として，王立協会の会長を務め，イギリス医学・薬学・植物学の発展に貢献し，British Museum の礎を創り上げた Sir Hans Sloane（1660–1753），重商主義時代末期，まさに Political Economy 生誕の時期に活躍し植物学をリンネ的な分類学から脱皮させ，社会の需要に応えるものに変えようとした Sir Joseph Banks（1743–1820）などをあげることができよう。

まず, あきらかにすべきは, 重商主義政策とイギリス近代科学, とりわけ自然哲学 natural philosophy・自然誌 natural history，の発展が手をたづさえて進行したことである。経済学 Political Economy が，こうした動きの所産として知的世界にもたらされたことは，十分ふまえられていなければならない。こうした認識を基礎に，ここでは，近年の科学史あるいは植民地科学史上の労作であるロンダ・シービンガー『植物と帝国』（Londa Schiebinger, *Plants and empire.* Harvard University Press, 2004）の提示した問題の一端を紹介しつつ，重商主義と「いのち」とのかかわりを探ることとしたい。(25)

1789 年に生じたかの「バウンティー号反乱事件」は，上述したようなイギリスの学問，とくに植物学と植民地政策との関連をあからさまにした，まさしく典型的な重商主義の帰結であった。いくたの文学作品，映像作品によってあきらかにされたこの事件は，Sir Josef Banks の指導した王立協会の後援のもとに進められた。「パンの木 tree of bread fruit」をジャマイカの砂糖プランテーションに移植し，奴隷労働者の安価な食料源とするとの遠大な計画のもとに，プランテーション経営者，英国海軍，王立協会が一体となって推進された政策展開過程で生じたエピソードであった。

しかし，こうした動きは，すでに 17 世紀にも大規模に展開され，カリブ海地域に薬種の材料を求めた略奪的交易に多くの科学者が関与することになる。『植物と帝国』の著者シービンガーは，Sir Hans Sloane の活躍する植物採集と平行して，植物とそれと密接な関連をもつ昆虫の生態を精細な図像をもってヨーロッパに伝えたドイツの一女性自然観察者の研究成果に着目する。その名は，Anna Maria Sibylla Merian（1647–1717）。彼女は，ドイツ，フランクフルト・アン・マインに，印刷・出

（25） ロンダ・シービンガー，小川真理子他訳『植物と帝国』工作舎，2007 年刊。引用は本書から。著者は，スタンフォード大学教授。なお，科学史における比較的新しい研究分野である植民地科学史の現況については，Focus: Colonial Science, in *Isis*, vol.96, 2005 を参照。

図 2　黄胡蝶

版業を営むスイス出身の一家に生まれ，とくに継父の慫慂もあって幼少時より描画に才を発揮した。13 歳の時，はじめて昆虫の生態を図像化し，以後，昆虫の観察研究に没頭したと彼女自身その著書に記している。[26] 1699 年，彼女は，オランダ政府の後援もあって，オランダ領スリナムに渡航し，蝶を中心とする昆虫（幼虫）の変態を観察し，その結果を彩色図像に残した（図 2）。さらに，その成果は 1705 年に『スリナムの昆虫の変態』として上梓された。[27] メリアンとスローンとの関係について，シービンガーはつぎのように述べている。

「興味深いのは，メリアンとスローンがこの植物をそれぞれ個別に，中絶薬として収集したことである。スローンは航海記[28]のなかでメリアンを引用したにもかかわらず，この植物の中絶誘発

（26） メリアンの伝記については，Kim Todd, *Chrysalis: Maria Sibylla Merian and the secrets of metamorphosis*, London, 2007.（邦訳：屋代通子訳『マリア・シビラ・メーリアン 17 世紀昆虫を求めて新大陸にわたったナチュラリスト』みすず書房，2008 年）がある。Merian にかんする評価および研究動向については，Sharon Valiant, Maria Sibylla Merian: recovering an eighteenth century legend, *Eighteenth Century Studies*, vol.26, No.3, 1993 を見よ。

（27） Maria Sibylla Merian, *Metamorphosis Insectorum Surinamensis*, 1705. ここでは，Merian, Maria Sibylla and Helmut Deckert, *Das Insektenbuch. Metamorphosis insectorum Surinamensium,* 2002 を参照した。上掲図像は本書 98 ページ，第 45 図。

（28） Sir Hans Sloane, *A voyage to the islands, Medera, Babados, Nieves, S.Christophers and Jamaica, with natural history of the herbs and trees, four footed beasts, fishes, birds, insects, reptiles &c. of the last of those islands; . . . . . ,* 2 vols. London, 1707.（注は筆者による。）スローンはイギリスにおける “Natural History”（自然誌）の発展に多大の貢献をし，とくに British Museum の設立は，かれの Collection を基礎にするものであった。同時にかれは医師として，薬剤師として活動し，この面では，かれの「航海」は，かれ自身の trade の利害を結びつけていた。例えば，Letter of William Byrd II, and Sir Hans Sloane relative to plants and minerals of Virginia,

作用について彼女から学ぶことはなかった（その逆もなかった）。メリアンの『変態』は，航海記の本文を書き上げたスローンが，その後に見聞したことを加えた補遺においてのみ引用された。スローンとメリアンは学術的な交流をもたなかった。もっとも，ロンドンの王立協会会員のジェイムズ・ペディヴァーが 1705 年に購入したメリアンの『変態』の一冊を，まさしく当時，その会長職にあったスローンが目にすることはあっただろうとは考えられる。[29]」

少々記述を先取りするような引用をあえてしたのは，この一文中には積極面・消極面のいずれから見ても 17–8 世紀科学の実態が，部分的であるが，遺憾なく表されていると考えるからである。スローンの著書の表題が明確に予示しているように，自然誌すなわち natural history は，とくにイギリスにあってはベーコン主義的科学観・学問観のもとで誰でも比較的容易に接近しうる知の一領野をなしていたことである。しかし，王立協会そのものが次第に制度化されるにつれて，学問的権威は曇りない眼による観察を次第に凌駕するようになる。スローンがメリアンの成果をそれとして認知しつつも，それを当時のヨーロッパ社会に還元するについては，消極的であったとも推測しうるのである。

上の引用にある「この植物」とはマメ科の植物黄胡蝶（おうごちょう）（別名ピーコック・フラワー，*Poinciana pulcherrima*）である（図 2）。スローンもメリアンもともにこれが中絶薬としてジャマイカやスリナムのプランテーション労働者に使用されていることを知っていたのである。とくにメリアンは，この薬種の社会的意味にまで想像力を広げることによって，たんなる自然誌的観察から一歩踏みだしたことになるであろう。著者シービンガーは，これについてのメリアンの記述を著書の冒頭に置くことで科学史の対象を「いのち」の問題領域にまで広げかつ深めることが，結果的にはできたと考えられる。それは以下の通りである。

「オランダの主人からひどい扱いを受けていたインディアンは，子供が奴隷になるくらいならばと嘆き（この植物の）種子を用いて中絶を行っています。ギニアやアンゴラから連れてこられた黒人奴隷は，子供を持つことを拒むそぶりを見せて少しでも境遇がよくなるよう願ってきました。実際あまりにもひどい扱いのため，彼女たちの中にはたえかねて自ら命を絶つ者もいました。生まれ変われば，自由に祖国で暮らせるものと彼女たちは信じているからなのです。[30]」

著者はさらに，「メリアンは奴隷の子殺しを政治的な抵抗の形態とみなし，中絶を直接に植民地闘争という文脈に位置づけた」とさえいう。[31]

The William and Mary Quarterly 2nd. ser, vol.1, No.3 を見よ。

（29） Schiebinger, ibid, p.108. シービンガー，前掲書，147–8 ページ。

（30） Schiebinger, op. cit, s.1. シービンガー，前掲書，8 ページ。

（31） Schiebinger, op. cit, p.107. シービンガー，前掲書，146 ページ。Merian, op. cit, p.99.

他方，スローンについては「スローンは，奴隷がこのような仕打ちから逃れるために〈自分の喉を切る〉ことを充分知っていたが，この観点から〈花の垣根〉（美しい花をつける黄胡蝶の垣根…筆者）について考えることはなかった。」あるいは「この点においてスローンは，中絶についてヨーロッパの男性医師の形式張った考えをジャマイカまで持ち込んでいた。」[32]とした。

ここに示される二人の立場の相違は，まさしく重商主義時代の経済思想の内包する二面性として解釈し直すことも可能である。エリザベス 1 世以来いわば制度化の方向を強めつつ展開する救貧制度は，誰が貧者を救うのか，すなわち，救貧のリソースをどこに求めるかというこの制度にとって中枢的問題をめぐって，そのときどきの政治情勢に翻弄されつつ新規の諸制度アイデア提案のあいだを右往左往していた。先に見た「信用」なども一見目新しい提案にみえるものの，救貧を moneyed interests の利益追求の道具にしかねない危うさを内包していた。こうした安定性を欠いた提案は，植民地プランテーションの奴隷労働者やその家族の状況と同様，なんらかの政治的抵抗に自らを結びつけざるをえない。

IV.

これまで素描してきたような「いのち」すなわち，生をめぐる諸状況は，経済思想の表面に現れることのない，きわめて隠微な動きのように見える。それぞれの時代を特徴づけるようなパラダイムにはなりえない，しかし，確実に社会的にはある種の排除の論理を発動し続けるようなものとして，大きな状況の要求する rhetoric の問題としてとらえることができるように思われる。それが rhetoric である限りそのときどきの思想の論理構造のなかに取り込まれることのない，陰の存在とみなされてしまう。とくに 18–9 世紀にかけての経済思想は，個を抽象することはあっても，個から出発することはない。個は数えられてはじめて個であるという方法のもとで固有の姿を失い，社会の中に完全に埋没させられてしまう。[33] 個の集合としての人口がしだいに人々の知的関心の対象とされるのも，こうした方向性を示しているであろう。数えるという rhetoric があらたな道具として生の現実を覆い隠す役割を果たす。18 世紀にあらためて人口思想や人口理論に関心が集まるのも，こうした背景があってのことであろう。Thomas Robert Malthus（1766–1834）が 1798 年に『初版 人口論』を著したとき，青年マルサスに去来したものは，人口現象を眼前にして，いまいちど個をいかに取り戻すかという問題であったように思われる。マルサスが，人口法則を原理的に提示したことは，かれが考えるより根源的問題探究への道を辿る一歩であったのであろう。数えることの精密性よりも，数えられるものの存在の曖昧性を宗教の力を借りてさえ解明しようと意図したこと。ここには

（32） Schiebinger, op. cit, p.109. シービンガー，前掲書，149 ページ。

（33） Mary Poovey, *A history of the modern fact: problems of knowledge in the sciences of wealth and society,* University of Chicago Press, 1998.

生きることの全体へなんとか接近しようとする青年マルサスの，生の暗い深淵に放たれた鋭い眼光があったように思われる。

（名誉教授）